
ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

【Nコード】

N9388Y

【作者名】

ジンダイ

【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しずつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

　　～最初の方は主人公側、敵側共にほのぼのとしていますが、主人公がある程度成長すればシリアスになってくる予定です～

　　～作者は初心者です。文章적におかしい所があると思いますが、ご指摘してくだされば嬉しいです～

プロローグ（前書き）

初投稿です。

ブローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。

そこにいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもついでんしポケモンのミュウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら言う。

ミュウツー「戦いは、復讐は何もうみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやってくれればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這ってきた。

???「帰ったぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんこくポケモンのダークライ。

ミュウツー「…どうだったか」

ダークライ「シェイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言っていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ」

ギラティナ「すまん…皆の説得を任せて…」

ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行ってくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミュウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会うことすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミュウツー「…そうだな」

ミュウツーはそう言うと、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミュウツー「私は前回の戦いには参加していなかった…もう戦いはうんざりだったからな」

ミュウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には無人島が写っていた。今だにかたずけられていないガレキがちらばっている。

ミュウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴拳を止める」

ミュウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」

ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれば…皆もやめてくれるかもしれないから…」

そして同じ頃、ある村で運命がうつごきだした…

プロローグ（後書き）

後書き

ふうやつと終わった〜途中で意味分かんなくなつて3回ほどきえちやったよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。文章力は乏しいですが、感想を書いてもらえれば嬉しいですよ。どうかよろしくお願いします。

6月3日 ポケモンが貰える日(前書き)

第1話 よう~~~~~やく始動!!!な~~~~長かった..
..軽く3、4回ほどきえたよ.....本文.....

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤ「準主人公と言ってほしいね」

一緒じゃん。

ナオヤ「ハア、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

(カチン) それ、本気なのかな？ナオヤ君？

ナオヤ「本気に決まってるじゃないか」

フーン (ニヤリ) じゃ、本編スタート!!!!

ナオヤ「何言ってたんだ？作者は？」

6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。
朝、この島のひとつの民家で少年が眠っていた。

少年「ZZZ…」

お母さん「コウタ、朝よ、起きなさい」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

コウタ「ん…ん…もう朝か…眠む」

少年…コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ…いいの」

コウタ「なぬ…！そうだったのか…！？僕としたことが…今いくぞ…！！」

コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人は今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

コウタ「リビングに到着…！！」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね…いつもとは大치가…」

コウタ「いただきますごちそうさまいってきますダツガチャドガ

ツバタツ」

コウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のコウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「コウタ、気をつけて行ってらっしゃい」

お母さんは玄関であつた事に気づいてないようだ。

コウタ「痛って…おい！ナオヤ！！危ねえだろが！！気づけろよ！！」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが！！！！」

この少年はナオヤ。コウタの幼馴染みであり、親友だ。

???「全く…二人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくンゲボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまった。

メイ「だゝれが乱暴凶悪女って？」

この少女の名前はメイ。二人の唯一の女友達だ。というより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど二人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきゃ」

そう言つて、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言った？（怒）」

ナオヤ「いえ何も（汗）」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になったので、コウタとナオヤの方が年上なのだ。

コウタ（メイって将来、ずっと黙ってたら絶対モテるよな…）

メイの事を密かに可愛いと思っているコウタは、ナオヤがボロボロにされているのを見ながらそうおもった。

メイ「じゃつ、あそこのぼろ雑巾はほつといて祠に急ぎましょっか」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「…………グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになっているナオヤだが、どうせいつもの事なのでコウタはほうっておいた。

メイ「ねえ、コウタ？最初のポケモン誰にするの？私はリリーラとホエルコがいいな」

ナオヤ「俺はアノプスとジーランスがいいZE」

コウタ（いつもながら復活早）

メイ「黙れ、社会のテスト*点が。（点数はある人物の要請により削除）」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…そのテ

ストは頑張つて追試でとりかえしたし……」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に二人は先に行つてしまった。

ナオヤ「おい！ まつてく「グボハッ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかった。

6月3日 ポケモンが貰える日（後書き）

後書き

ナオヤ「オイ！作者！！」

んゝ、何ゝ

ナオヤ「何だよ！あの俺のあつく……」

ネタキャラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！？」

じゃあ、また今度。 ダツ！！

ナオヤ「あつ、逃げられた……」

さあ、いざ祠へ！！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサースデイが、ぼやきながらGENT
Sの続きを書いております。

コウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょ、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

コウタ「え！？そうなの！！？」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7
1点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすごいんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だった
ということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサースデイ「うるせえ！！！」

ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！
！！

さあ、いざ祠へ！！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタったら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

コウタ「あつ、見えてきた」

コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「コウヤさん！？」

コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行ってくれるんですか？」

この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けっこうチャラくて軽い性格だ

コウヤ「おうよ！いけ！！ジーランス！！！」

コウヤのモンスターボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じらっ」

ユウヤ「さ、みんなこれに掴まってくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掴まった。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！！」

ジーランス「じらっ！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシャン

4人はジーランスと共に、海底へとむかった。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボ！！……」

コウヤ（あれ？そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほっ、げほっ、げほげほげほっ」

ユウヤ「悪いい、ジールランスは3人乗りだったわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない様子で謝る。

メイ「さっ、行くわよ」

コウタ「うん」

ナオヤ「俺についてはノーコメントですか…」

そして4人は祠の奥に向かってあるきだした。

さあ、いざ祠へ！！（後書き）

後書き

短くてすみません。時間ないんで（汗）

そして、皆ナオヤの事はスルーして話を初めた。

村長「では、儀式の内容はわかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「……………ハ……………イ……………」

まだナオヤは大丈夫なようだ。

村長「まず、儀式の内容を確認する。最初にホエルコ又はジール
ンスを選び、受けとる。そのあと、儀式を行いもう1匹のパートナ
ーは、アノプスカリリーラかを決める。わかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！」

ナオヤ「OK！！！」

コウタ（復活早……）

この村では、最初のポケモンがキモリ、アチャモ、ミスゴロウの
ホウエン初心者用ポケモンではなく、世界の中で野性がここにしか
生息していないアノプス又はリリーラ、この島から旅立つために必
要な技、なみのりを覚えているホエルコ又はジールンスなのだ。

この島の周りは激しい海流が流れているので、船がとおれず、ポ
ケモンでいくしかないため、ポケモンリーグはこの辺りの島から旅
立つトレーナーのみ、ジムバッチ0個でもなみのりを使うのを認め
ている。

村長「やり方は、まず自分の旅の目標を書いた紙を祭壇の火に投
げ入れる。そしてその紙が燃え尽きるまでの時間でパートナーを決
める。これもいいな？ では、今から儀式を初める。まず誰から……」

ナオヤ「ハイハイハイ！！！！俺から行きます！！！」

コウタ「あつ、抜け駆け……」

メイ「まったく……」

ナオヤは早速、紙に旅の目標を書き炎の中に投げ入れる。

ナオヤ「行けえい!!」

それと同時に村長はストップウォッチで、炎の中の紙がどれくらいで燃え尽きるのかを測る。

そして、1分位した後、紙は完全に燃え尽きた。

村長「え」と…今のタイムから…………ナオヤ、君は、……………」

村長は何やら名簿の様なものをみていたが、口を開いた。

村長「アノプスだな」

ナオヤ「イヨッシャアアアアアアアアアアア!!」(ドヤ顔)

ナオヤは自分の欲しかったアノプスが選ばれ、思わずドヤ顔をしたが、

メイ「キモイ」

コウタ「それは…ちょっと…………」

ユウヤ(プププ、バツカじゃねえのか、こいつ)

村長「……………」(失笑)

うけなかった様だ。

ナオヤ「……………」(泣)

メイ「さ、しょげてるやつはほつといて私の番」

メイが張り切って儀式をしている間、コウタは壁の凹凸を触っていたコウヤに、気になっていたことを聞いた。

コウタ「あの…コウヤさん…」

コウヤ「ん、何だ？」

コウヤは壁から手と目を離さずに答える。

コウタ「どうしてこの村には、こんな儀式があるんですか？」

コウヤ「この儀式が発祥した訳か？」

コウタ「はい。何か知っていますか？調べたけど何処にも書いてなくて」

コウヤはやっと壁から目を離して言った。

コウヤ「悪い、俺も知らん」

コウタ「そうですか…」

コウタは少し、がっかりした様子だ。

コウヤ「そもそもこの儀式自体、あまり意味ないしな」

ナオヤ「どうゆうことだ？」

いつの間にか復活していたナオヤが聞く。

コウヤ「実は最初のポケモンは、みんなもう決まってるんだ、スクールのアンケートで。この儀式は形だけだよ」

コウタ、ナオヤ「……………」

二人は絶句する。

コウヤ「この事は、なるべく秘密にな」

ナオヤ「……………なんで、こんなまわりくどいことするんだ？」

コウタ「伝統だからだろうね…」

その時、メイが儀式を終わらせて戻ってきた。

メイ「おゝい、コウタ、ナオヤ、私はリリーラとホエルコになったよ」

コウタ「う、うん。」

ナオヤ「よ、よかったな」

もうポケモンは決まっていたということを知ってしまった二人は、複雑な気持ちでメイにこたえる。

メイ「？二人共どうかした？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ、何でもありません！！！」（汗）

メイ「そう？」

慌てていた二人をメイは疑わしそうに見ていたが、ポケモンをもらったことで機嫌が良いらしくそれ以上何も聞かなかった。

コウタ「次は僕の番か…行ってくる！」

ナオヤ「お、おう。」

メイ「行つてらっしゃい。自分の好きなポケモンが貰えるといいね」

その言葉を聞いた二人は、また複雑な表情になる。

コウタ「う、うん…そ、そうだね」(汗)

ナオヤ「アハハハハハ…」(汗)

メイ「本当にどうしたの？二人共？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ！！本当に何でもありません！！！」

(汗)

メイ「？」

キョトンとしているメイの横を走って通り過ぎ、コウタは村長の元へ向かった。

村長「では、今からコウタの儀式を初める」

コウタ「ハイ！！！」

コウタは紙を受けとると、早速かきはじめた。

コウタ(あれ？僕みたいに欲しいポケモンの名前をはっきり書いてない時はどうなるんだろう……)

コウタは書きながらそういうことを考えていた。

ユウヤ(はっきり書いてない奴は、村長がどっちをやるのか決めるんだっとな…コウタはどっちになるんだか)

そして準備が完全に済んだコウタは、紙を炎に投げ入れ、その紙は燃え出す……

はずだった。

紙は炎の中にはいるも、すぐにそこから真上に飛び出し、しばらく空中をまっただと、村長の後ろにある石板の上に乗ってしまった。

村長「ま、まさか……こんな事が本当に!?!?………」

村長はかなり動揺している。

コウタ（あちゃしくったかな…）「すみません、もう一度やり直します」

コウタが石板に手を伸ばし、紙を取ろうとしたのだが……

村長「やめろコウタ!?!お前のパートナーはもう決まった!?!」

半分取り乱している村長の声により、中断させられた。

コウタ「どうゆう事ですか?」（アノプスカリリーラどっちだろ
う…）

村長「…………お前のパートナーとなるポケモン達は…この中にいる」

なんとか落ち着きを取り戻した村長は石板を指差す。

コウタ「一体その石板の上に紙がのつたらどうなるんですか?村長」

ナオヤ「この石板がポケモンなのか？」

兄弟で村長に問う。

村長「いや、正確にはこの祠の奥に封印されているポケモンだ…儀式の紙が石板の上につたということとは……まさか代々伝わる、儀式の元になっている話が現実になるなんてな…夢にも思わなかったことだ」

コウタ「一体なんの話を……」

村長「コウタよ、こちらにこい…今から石板の封印を解き、お前のポケモンと会わせる…お前は守護神に選ばれしものだ…」

運命の齒車は加速を始める…この少年達と守護神と呼ばれるポケモン達との出会い……そしてまた、別の出会いにより………
運命はもう、止まらない。

伝統の儀式（後書き）

後書き

コウタ「で、結局僕のポケモンは？」

それは秘密。

コウタ「まあ、いいか。どうせ次わかるし……」

分かんないよ。

コウタ「分かんないの！！？」

だって次回とその次の話では、君達の出番はないし。

コウタ「じゃあ誰がでるんだよ！？」

次回は新キャラが出る、とでもいっておくよ。

コウタ「次の次は？」

いや、流石にそれは言えないね。

コウタ「……………どうしてもダメですか？」

うん、ダメ。

コウタ「じゃあ僕にだけ」

しょうがないな　ゴニョゴニョ

コウタ「えっ！？あいつが！！」

そだよ。じゃあ今日はこの辺でさよなら

コウタ「唐突におわったな……」

7人のトレーナー (前書き)

よし、第5話完成つと。2日かけて5、6時間ほどかったよ。

ナオヤ「短い割には時間かかり過ぎじゃね？」

DSのタッチパネルで書いてたらそりゃ遅いわ。

ナオヤ「はあ、DS!!? どういうこつた!？」

今までの小説は全て3DSやDSIのインターネットブラウザーで書いてました。画面閉じたら文章消えるわ、考えてたら急に接続切れるわでもう大変だよ……

ナオヤ「PC持っていないのか？」

持つてるのは持つてるけど親がインターネットに接続することを許してくれない!!!

ナオヤ「悲しいな、だからいつもあんなに短かったのか」

そうだよ、でも君のモデルである伝書鳩リネロサーステイからは本名と住所さえばらさなければナオヤに何をして、何を言ってもいいっていう許可なら出たよ。

ナオヤ「その許可はいらああああああああん!!!」

さて、僕が一生懸命書いた第5話、スタート!!!!

* 7人のトレーナー *

AM 6:00

ここは119番道路、野生のヒンバスが生息している場所だ。
この道路の隅に立ててあるテントから、一人の男が出てきた。

??? A 「ふぁゝ、よく寝たゝ」

??? B 「おはようございます、ブイマル先輩」

すでに外にいた青年が挨拶をする。

ブイマル 「おはよ、ヒカル」

この二人は、ブイマルとヒカルというようだ。

??? C 「……………いい…朝だな……………」

テントの裏に座っていた男が言う。

ブイマル 「おう、ミスト。おはよ」

ミスト 「……………おはよう……………」

この男は、ミストというらしい。結構無口な様だ。その時、

??? D 「おっはようございませー!!」

??? F 「今日も！元気にー!! 引っこうZEEEEII!!」

テントから、異様にテンションが高い二人が出てくる。

ヒカル「マサヤ…シュウ先輩…いつもながら、朝から元気よすぎですね…」

ヒカルが呟く。この二人の名はマサヤとシュウ。

マサヤ「シュウさん 朝バトル行きましょう ……!」

シュウ「OK!! いくZO!! メタグロス!!」

マサヤ「ドリュウズ!! GO ……!」

早速、朝一番にバトルをするマサヤとシュウ。

???F「なんだなんだ? また、マサヤとシュウか!」

???G「にぎやかなこった」

また、テントから二人の青年が出てきた。

ブイマル「おっ、リョウヤ、ハヤト、おはよ」

ヒカル「おはようございます!!」

二人の名はリョウヤとハヤトである。

リョウヤ「おはよ」

ハヤト「おは… なんか腹へった」

ブイマル「そうだな、メシにするか」

そしてブイマル、ヒカル、リョウヤの三人は朝御飯の準備を始め、ハヤトは魚を捕るため、川へ行った。

リョウヤ「行け、ロトム!!」

リョウヤがモンスターボールを投げると中からプラズマに身を包んだポケモン、ロトムが出てきた。

ロトム「トム」

そこでリョウヤは何やら特徴のあるモーターが付いた電子レンジを取り出す。

リョウヤ「ロトム、こいつを頼む」

ロトム「ロトッ！」

ロトムは電子レンジの中に入り、ヒートロトムへとフォルムチェンジする。

リョウヤ「よし。ロトム、よろしくな。じゃあまずはこれと…あれと…」

ロトムはリョウヤに渡された冷凍食品を、どんどん暖めていく。と、そこへハヤトが帰ってきた。

ハヤト「おゝし、魚捕ってきたぞ」

ブイマル「でかしたぞ！ハヤト」

ブイマルが焚き火でご飯を炊きながら言う。

ヒカルは自分のエレキブルの炎のパンチ（弱火→中火）で目玉焼きを作っている。

ハヤト「よし、じゃあ俺も魚を焼くとするかな。いくぞ！サザンドラー！！」

ハヤトはボールから、サザンドラを出す。

ハヤト「サザンドラ、弱火の火炎放射」
サザンドラ「ドラッ！！」

ハヤトとサザンドラは魚を焼き始めた。

シュウ「メタグロス、コメットパンチ！！！！」
マサヤ「穴を掘るでかわせ！！」

シュウとマサヤの二人はバトルをしている。
ミストはそんな6人を黙って見守っている。そして、食器の用意を始める。

準備をしていないシュウとマサヤは量を減らされ、次こそはちゃんと準備するぞ、と昼には忘れる誓いをする。

これがこの7人の、日常の光景である。

午後4時頃、ヒマワキシティ。

ツリーハウスの立ち並ぶ町に、あの7人の姿があった。

ブイマル「さあ、まずはポケモンセンター、そこからヒマワキジムだな」

どうやら彼等は、ジム巡りをしている様だ。しかし全員ではない様子。

ポケモンセンターとは、赤い屋根の大きな建物で、そこでは受付にジョーイさんという人がいる。この人たちは皆親戚で女の人はそっくり同じ顔をしている。

シュウ「絶対バッチをGETするZE」

マサヤ「頑張って下さいよ ブイマルさん にシュウさん」

リョウヤ「ひとまず、俺らはトレーニングにでも行くか、ハヤト」
ハヤト「そだな。ヒカル、お前も来るか？」

ヒカル「はい！よろしくお願いします！！」

ミスト「……………」

7人はポケモンセンター…通称ポケセンへと向かった。

ヒマワキシティのポケセンは町の西側にあった。早速入り、ジョ

ー伊さんに傷ついたポケモンを預ける。その後、預けなかったポケモンと共にそれぞれの場所へと向かった。

ヒマワキジム

シュウ「たのもおおおおおおお!!!」

ブイマル「騒がしいぞ。迷惑だろうが、シュウ」

大声を出してジムに入るシュウをブイマルが抑える。

二人が奥に進むと、そこには飛行機のパイロットの格好をした女性、ヒマワキジム、ジムリーダーのナギが立っていた。

ブイマル「お久しぶりです、ナギさん」

ナギ「あら、誰かと思ったらブイマル君にシュウ君じゃない。久しぶり。去年のリーグは惜しかったわね」

どうやら彼等は彼女と顔見知りの様だ。

ブイマル「はい、まさか予選の最初で相手がミストとは思いませんでしたよ」

シュウ「あのマサムネとかいうやつ…かなり強かった……」

シュウが珍しくうなだれ…

シュウ「だが俺はへこたれないＺＥＥＥ！！次は必ずかああつ
！！！！」

でも無かったようだ。

ナギ「そう言えばあとの５人はリーグでＢＥＳＴ８まで入ってた
っけ？」

シュウ「はいつてましたＹＯＯ！！！」

この世界では、各地方にあるジムのジムリーダーを倒すことで手
に入るバッチを８個、集めることで５つの地方で行われるポケモン
リーグと言う大会に出ることが出来る。まずは、バッチを８個あつ
めたトレーナーと昨年のリーグでＢＥＳＴ８入りした者で予選を戦
う。その勝者と昨年のＢＥＳＴ４入りしたもので本選を行い、優勝
者を決める。

さらに、優勝者と準優勝者はこの世界で最もレベルの高い、全ポ
ケモントレーナー憧れの大会…ワールドチャンピオンリーグ（通称
ＷＣＲ）に参加することができる。ＷＣＲに参加出来るのは、他に
各地方の四天王、チャンピオン、フロンティアブレン等の凄腕の
トレーナーばかりだ。２か月にも及ぶ総勢４０人ほどが争うリーグ
戦のチケットは、プレミアがつくほど。

開催する地方はローテーションで変わり、昨年はシンオウ、今年
はイッシュで行われる予定だ。

ブイマル「ミストが昨年のホウエンリーグ優勝、ＷＣＲで１８位
でしたね。ハヤトとリョウヤが準決勝で引き分けたんで昨年はホウ
エンから３人、ＷＣＲに行ったことになります」

シュウ「リョウヤはＷＣＲで２８位、ハヤトは２６位だったよな」
ナギ「みんな頑張ってるわね」

ナギは感心しているが、ブイマルはまだ心残りがあるようだ。

ブイマル「本当なら俺達の中でミストの次に強いのは俺なんだけ
どな…」

シュウ「勝負は時の運、ダツZEE!!!」

シュウがブイマルを持ち前の高いテンションで励ます。

ブイマル「そうだな…よし！ナギさん、ジム戦お願いします！！
！」

再び元気になったブイマルはナギにジム戦を申し込む。

ナギ「いいわよ。こっちも実力を測る、何てことは言わずに全力
でいくから！！セイカ、審判をお願い」

セイカと呼ばれたヒマワキジムの門下生はバトルフィールドの手
前に立つ。ブイマルとナギも配置につく。

セイカ「では、今からヒマワキジム、ジムリーダーのナギとチャ
レンジャー、ブイマルのジム戦を開始します。ルールは3vs3の
勝ち抜き戦、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。
それでは、バトル開始！！！」

勝負は一瞬でついた。

セイカ「ジ、ジムリーダーの…チルタリス戦闘不能……よってこの勝負、チャレンジャー、ブイマルの勝利」
ナギ「流石ね……」

一瞬で3匹のポケモンがストレート負けし、項垂れるナギは倒れているチルタリスをモンスターボールに戻す。

シュウ「よし、次は俺と…」

飛び出そうとするシュウを、ブイマルは自分のポケモンをモンスターボールに戻しながら止める。

ブイマル「まで、今ナギさんとそのポケモンは戦ったばかりだぞ」
ナギ「お気遣いありがと、ブイマル君。私は今からポケモン達をポケモンセンターに預けてくるわ。シュウ君とはその後、さっきとはまた別のポケモンで相手してあげるから」

シュウ「まじすか？ よっしあ　！！ヒヤホーオウイ」

今のナギの言葉を聞いて、テンションが上がるシュウ。

そして、そのバトルもシュウが一瞬で制す。

シュウ「へへへ、バッチGETだぜ!!!」

目的を果たした二人は、ナギと別れ皆の所へ向かっていた。
ブイマル「もうすぐ待ち合わせの時間、急ぐぞ」

そして、集合場所では既に5人が待っていた。

ハヤト「遅いぞ二人共」
リョウヤ「勝ったのか？」
シュウ「勿論SA!!!」

シュウはヒマワキジムに勝った証、フェザーバッチを見せる。

マサヤ「やりましたね おめでとunggございます ブイマルさん、
シュウさん !!!」

ヒカル「じゃあ、次はトクサネシティですね」
ミスト「……………行くぞ……………」

7人は歩き始める。

次の目的地に向けて……………

7人のトレーナー（後書き）

後書き

さあ、新キャラ一気に7人登場です。

ナオヤ「出しすぎじゃね!？」

大丈夫大丈夫。心配ないさ。

ナオヤ「そうだろうか……」

コウタ「今回はあのポケモンですよ!あの……」

コウタ君、それ以上は言ったら駄目だよ。

コウタ「わかってますよ、そのくらい」

ナオヤ「何だ何だ?何の話をしてるんだ?」

教えちゃ駄目だよ。

コウタ「ハイ!」

ナオヤ「???」

コウタ「さて、僕達はこの辺で」

さようなら。あ、後あの7人はチートではありません。さて、

皆さん、次回をお楽しみに!!!

ダークライ

ミスト達7人がヒマワキシティを主発した頃、一匹のポケモンがホウエン地方の上空を飛んでいた……ダークライだ。

ダークライ「くそっ、くそっ、くっそおお!!!!ラティオスもラティアスもジラーチも……あの分からずや共があああ!!!!アイツらはこの戦いが世界の危機ということがわからんのかああ!!!!」

……なにやら絶叫している。

実は先程、ラティオスとラティアスには「この戦いには、一切介入しない」と断言された上に、ジラーチに至っては「めんどくさい……もう寝る……」とまで言われていた。しかし特性のナイトメアやあくむで眠っていたジラーチを、無理やり起こしたダークライも悪いのだが。

ダークライ「……くっ……流石に6匹だけでは争いをくい止めるのはまず無理だろう……他に協力者を探さないと……」

その時、ダークライは北の空にオーロラのようなものが出ていた事に気づく。

ダークライ「あれは、たしか………よし、行ってみるか」

ダークライは北の空に向かって飛んだ。

ミナモ沖、上空。

???「何しに来た…ダークライ」

ダークライ「……………デオキシス」

オーロラの下に居たのは、胸の中心に紫色の水晶を持つオレンジと薄緑色のポケモン、デオキシスだった。

ダークライ「……………ひとつ話したい事がある…聞いてくれないか？」

デオキシス「丁度いい、俺もお前に話があった」

それを聞いたダークライは、デオキシスが自分達に協力してくれるのかと期待したのだが…

デオキシス「ミュウやレックウザ達と共に戦わないか？」

期待どおりではない…いや、むしろ正反対の事を言ってきた。

ダークライ「…お前…ミュウ達と…」

デオキシス「嗚呼、俺はそっちに協力するつもりだ。ダークライ、お前が来たら戦力になる……一緒に戦わないか？」

ダークライは首を横に振る。

ダークライ「……お前達のやっている事は間違っている…あんな無茶苦茶な目的、果たされてよいはずがない！」

デオキシス「…そうか……お前が噂の戦争反対派か……」

デオキシスは敵意をむき出しにしてきた。

デオキシス「もう一度きく、俺達と来る気は無いんだな」

ダークライ「嗚呼、無い」

デオキシス「残念だ…お前ならわかってくれると思ったのだが…それならしょうがない……覚悟しろ、ダークライ」

二匹はしばらく睨みあっていた。

デオキシス「しんそく！」

ダークライ「まもる！」

デオキシスは細身の素早そうな姿…スピードフォームになり、ダ

ークライにしんそくで向かって行ったのだが、ダークライはデオキシスがスピードフォルムになる一瞬の隙にまもるを繰り出し、しんそくを防ぐ。

デオキシス「ちっ」

ダークライ（俺はデオキシスを倒す気はない…ひとまずこの場を収めなければ…）

デオキシスは弾かれた勢いでダークライの後ろに回り込みながら、体が全体的に鋭くなった姿、アタックフォルムになる。

デオキシス「ばかぢk…」

ダークライ「ふいうち！」

デオキシスがばかぢからで攻撃しようとするも、ダークライは先制技でさらに後ろに回り込み、先に攻撃。それにより、デオキシスのばかぢからは止められてしまった。

ダークライ「ダークホール！」

ダークライは畳み掛ける様に、敵を暗黒の眠りへと誘う技、ダークホールを使った。

デオキシス「しんぴのまもり」

今度はゴツイ姿、ディフェンスフォルムに変わったデオキシスがダークホールをしんぴのまもりで防ぐ。

ダークライ（くっ……一旦デオキシスを眠らせて、この場をどう

収めるのか考えようと思ったんだが…)

さらにデオキシスは、スピードフォームへと姿を変え、

デオキシス「しんそく！」

デオキシスは再び、しんそくでダークライに向かっていった。

ダークライ「まもる！」

ダークライは咄嗟にまもるを発動させたのだが…

デオキシス「甘い！」

デオキシスはしんそくで攻撃せずにダークライの後ろに回り込む。

ダークライ(しまった！……いや、奴はおそらく攻撃するときに
アタックフォームになるだろうから、その隙に攻撃すれば…)

と、考えたダークライがあくのはどうをためながら振り向くと…

デオキシス「ばかぢから！！！」

ダークライ「なっ…！」

デオキシスはアタックフォームにならず、スピードフォームのまま
しんそくの勢いに乗ってばかぢからをばなした。その速さに反応
しきれなかったダークライはばかぢからを真正面からくらう。

ばかぢからは格闘タイプなので、ダークライに効果は抜群だ。

ダークライ「が…！」

ダークライは倒れはしなかったものの、よろめき、落下しそうになる。

その隙にデオキシスは、上昇しながらアタックフォームへとその姿を変える。

デオキシス「終わりだ。めいそう…はかいこうせん!!!」

ふらついているダークライに向かって、デオキシスは上から叩きつける様にはかいこうせんを放つ。

ダークライ「……………っ」

ダークライは悲鳴をあげる間もなく、遥か下の海へと落ちていった。

デオキシス「やったか……だが、ダークライを捕らえておけば、後から有利になるかもしれんな……よし」

デオキシスはダークライが上がって来ない事を確認すると、自分の影の様な…分身の様な者を大量に造りだした。

それはダークライを探し、下の方へと向かって行った。

ダークライ（後書き）

後書き

ということで、ジンダイ初のバトルシーンでした。うまく書けたかな…（汗）

コウタ「ていうか、ダークライさんの性格が最初と最後で違う気が…」

……まあ、いいんじゃない？彼の個性なんだよ、きっと

コウタ「そうですか…次は僕たちだよね」

うん、コウタのパートナーとなる守護神と呼ばれるポケモン達とは何者なのか！？

コウタ「次回もよろしくお願いします！！！」

守護神をゲットせよ！前編（前書き）

ウギアアア~~~~~！！！！

ナオヤ「どうした!？」

今気づいた〜まじで!!!

コウタ「何がですか!?!？」

自分の受験が…3月と思ってたら……1/24だ~~~~~
~~~~~!!!!!!

ナオヤ「2ヶ月も間違えてたじゃん!?!」

コウタ「どうするんですか!?!？」

……いまから2ヶ月くらい休ませてください……↑土下座

ナオヤ「しよ~~~~がねえ〜なあ~~~~、休ませてや、る、よ」

……ありがとうございます（後から覚えとけよ…ナオヤ）

コウタ「ということで、唐突ですが、今年最後の1話、スタートです!」

ナオヤ「うちのポケ作者が迷惑かけて、本当にすみません!いつもの事ですが今回はさらに酷い文章です!やはりうちの作者は間抜けです!」

……………↑反論出来ない。

## 守護神をゲットせよ！前編

コウタ達は村長の放った言葉に呆然としていた。

コウタ「守護神？」

ユウヤ「儀式の元になっている話…聞いた事も無いな…」

メイ「一体どんなポケモンなんですか？」

村長「…すぐにわかる、コウタ、こっちへ来い」

コウタ「あ、はい…」

コウタが石板の前に立つと、村長は2つのモンスターボールを取り出した。

村長「最初はホエルオー……」

モンスターボールを1つ、石板の上へと乗せる。

村長「最後はジーランス……」

今度はもう1つのモンスターボールを、石板の下に置く。

村長「そしてすべてが……ひらかれる」

ズズズズズズズズ

急に石板が震動を始める。

メイ「ななななな」

ユウヤ「何だ！？急に！！？」

ナオヤ「石板が…」

コウタ「割れていく……………」

コウタ達の言う通り、石板は音を立てて割れ始めていた。

村長「今は、この石板に書かれている言葉…そしてこの場所、『御触れの石室』の守護神を呼び出すために必要なことだ……………」

そして、完全に石板が割れた。その奥には、それぞれ氷、岩、鋼の体をしたポケモン達が立っていた。

ユウヤ「……………村長……………」

村長「なんだ？」

ユウヤ「これは…どうゆう事ですか……………」

ユウヤはそのポケモン達を見て、驚愕していた。

メイ「あのポケモン達は？」

ナオヤ「見た事ないポケモンだな……………」

コウタ「ユウヤさん、あのポケモン達は…何なんですか……………？」

ユウヤ「俺も古い文献とかでしか見た事はないんだが……………まさかここにいたとは……………夢にも思わなかった……………」

村長が4人の方に向き直る。

村長「……………嗚呼、あのポケモン達は……………」

伝説のポケモン、レジアイス、レジロック、レジスチルだ」

コウタ、ナオヤ、メイ「!!!」

ユウヤ「村長、何故この3匹がこんな所に…」

その時、村長が自分の方を見た事に気づいたコウタは、とっても嫌な予感がした。

コウタ「あの…もしかして……この3匹って……」

????A「ソノマサカダ、マスター」

急に声が聞こえた。

ナオヤ「何だ、この片言は？」

????A「ワタシダ」

皆は声のする方を見る。

レジスチル「ワタシハ、レジスチルトイウ」

全員「……………喋ったあああああ!!!?」

??? B「喋っちゃあ駄目なのかよ、屑共が」

??? C「ロック、あなたは何時も口が悪いですよ」

さらにあと2人…いや、2匹の声がした。

コウタ「まさか…後の2匹も…」

レジロック「よっ、お前が俺達のパシリになってくれる奴か。頼りねえなあ。と、俺はレジロック」

レジアイス「私はレジアイスです。ロック、言葉を慎みなさい。あの人はあなたのパシリではなく、（あなたみたいに馬鹿そうですが一応）マスターですよ」

レジロックは今の言葉で、頭にきたようだ。

レジロック「なんだと！？このオカマが！！！」

レジアイス「誰がオカマなんですか？」

レジロック「お前が女言葉ばかり使って気持ち悪いからだよ！！！」

今のはレジアイスも力チンときたようで、

レジアイス「これは敬語と言います。あなたみたいな（単細胞で短足の）人にも（しょうがなく）敬語を使って（やって）るんですから感謝しなさい」

レジロック「んなもんするかよ！第一全部聞こえてるぞ！！この氷オカマが！！！」

コウタ達全員が呆然としてるなか、口喧嘩（というより罵り合い）を始めた。

レジアイス「いい加減怒りますよ？」

レジロック「勝手に怒っとけよ、オカマ野郎！！！」

レジアイス「オカマオカマと…あなたはそれしか言えないんですか？」

レジロック「うるせえ！！！やんのかコラア！！？」

レジアイス「良いですよ。後で後悔しても遅いですからね」

レジロック「おう！！！上等だ！！！来い！！！」

レジアイス「行きますよ」

2匹は身構える。

コウタ「オカマとかいつてるけど…」

ナオヤ「兄貴、あの2匹って性別あんの？」

ユウヤ「いや、無い」

メイ「第一…あの無表情で口喧嘩されても……」

村長「本当に怒っているのか解らん、ナレーターのしょうもない」

コウタ「ナレーター？」

村長「いや、こつちのはなしだ」

レジアイス「きあいだま」

レジロック「失せろ！きあいパンチ！！」

ズドオオオン！！！！

レジアイスの腕からはなたれたオレンジ色の気合いの塊と、レジロックの拳に集まった気合いの塊がぶつかりあった。

コウタ「すごい迫力だ！！！！」

ナオヤ「言ってる場合か！！？」

レジアイス「ラスターカノン」  
レジロック「ほのおのパンチ！！！！」

レジアイスの放った灰色の鋼弾を今度は炎を纏った拳ではねかえすレジロック。

レジアイス「でんじほう」  
レジロック「かみなりパンチ！！！！」  
レジスチル「ヤメロ！マモル！！」

今度はレジスチルが間に入り込み、レジアイスの電撃を帯びた弾とレジロックの雷を帯びた拳をまもるで防ぐ。

ユウヤ「おつ、止めに入ったぞ」  
メイ「鋼タイプは岩タイプにも、氷タイプにも強いから…もしかしたら止められるかも…」

レジアイス「きあいだま」  
レジロック「きあいパンチ」

二匹の技の間には、まもるを終えたばかりのレジスチルがいる。

レジスチル「チョットマて ギャアア！！！！」

まもるは連続で使えないので、レジスチルはもろに二匹の攻撃を受けしまった。

レジスチル「クッ…マダd」  
レジアイス「鉄屑は黙ってて下さい、れいとうビーム」

レジロック「ああん？うつぜえんだよ片言野郎！！！！れいとうパ  
ンチ！！！」

レジスチル「……………」

レジスチルは、完全に凍りついた。

コウタ「あつ……」

ユウヤ「ヤバいなあ……………」

メイ「レジスチル…弱っ！？」

ナオヤ「……………」

何やらナオヤがレジスチルに拝み始めた。

コウタ「どうした？ナオヤ？」

ナオヤ「あのレジスチルと言う奴…何か俺と同じ匂いがする…気の  
せいかな？」

ナオヤは真顔で言う。

コウタ「う、うん…気のせいじゃない？」（絶対気のせいじゃない！例え命をかけても気のせいな訳あるか！ナオヤとレジスチルは似た者同士…いや、もはや兄弟同然の境遇だよ！！！！）

コウタは心の叫びを押しとどめ、誤魔化した。

ナオヤ「そつか…そうだよな…」

コウタ「そつ、そう！そうだったて！！」

村長「コウタ…話している所悪いが…今はそれどころではないだ  
ろつ。ほら、受けとれ」

村長はコウタに3つのモンスターボールを投げ渡す。

コウタ「えっ！？」

コウタはあたふたしながら受け取った。

コウタ「あのーもしやー僕にこの3匹をゲットしろと？」  
村長「そうだ」

コウタはお互いに技のぶつかり合いをしているレジロック、レジアイスと完全に凍りついているレジスチルの方を見る。

コウタ「すみません。無理です」

レジスチル「コウタヨ、オマエハワガルジタチニワタシタチノ  
マスタートシテエラバレタノダ」

レジスチルが凍ったまま話しかけてきた。

レジスチル「ダカラ、ハヤクワレワレヲツカマエ…」

レジロック、レジアイス「だまれ！！黙りなさい」

レジロック「ほのおのパンチ！！！」

レジアイス「きあいだま」

再びレジスチルに攻撃をする二匹。

レジスチル「オマエタチャメル　グガバツ」

レジスチルは反対側の壁まで吹き飛ばされ、祠改め、御触れの石  
室の壁は悲鳴をあげる。

コウタ「村長、帰る時は何処から出ればいいんですか？」

村長「いや、帰る気なのか？」

コウタ「はい。もう付き合ってられません。僕は普通のポケモンで十分だ…」

レジスチル「マスター…」

どうやらレジスチルは（一応）無事だったようだ。

レジスチル「マ…マズハワタシヲ…ツカマ…エ…ロ…バタッ」

レジスチルは倒れた。

村長「ほら、コウタ、今の内にモンスターボールを」

村長はそう言うが、肝心のコウタは…

コウタ「ああ、空が綺麗だ…」

現実逃避をしていた。

ユウヤ「おい、戻ってこい、ここには空はないぞ」

コウタ「アハハハハハ天井が綺麗だなあ」

ユウヤ「…行け、ペリッパー」

ペリッパー「ペリ！」

ユウヤは自分のモンスターボールからペリッパーを出した。

ユウヤ「ペリッパー、そのぼけっとしてる奴にみずてっp」

コウタ「アハハハハハここはどこ？僕はだれ？」

コウヤ「……………やっぱりハイドロポンプ」  
ペリッパー「ペッ〜リイ！」

ペリッパーは口から思いっきり水を打ち出す。

コウタ「バボツ…」

コウタの顔面に水がかかる…というよりぶつかった。

コウタ「何するんですか！…！」

コウヤ「いいから状況をよく見る！！…あんなに二匹が暴れていてここが無事だとも思うのか！？…ここまで耐えてるのが奇跡だつて…！！！」

ナオヤ「あつ…」

メイ「そう言われてみれば…」

コウタ「ヤバイかも…」

そこにいる5人は一斉に青ざめる。

村長「いかん！…ここは海底だ！！崩れたりしたら…コウタ！！！」

コウタ「はっ、はい！！！」

コウタは慌てて返事をする。

村長「早くレジスチルを捕まえんか！！！」

コウタ「ははははい！」（いいのかな…）

コウタは倒れているレジスチルに躊躇しながらモンスターボールを投げる。

レジスチルはモンスターボールから放たれる赤い光に吸い込まれ、そのままモンスターボールはその場で振動を始める。

そしてモンスターボールは完全に静止した。

コウタ「レジスチル…ゲットしちゃた…」

メイ「伝説のポケモンかあ…コウタ凄いじゃん！」

ナオヤ「強いんだろ…うな…いいなあ…」

と、話しているのも束の間、

レジアイス「ふぶき」

レジロック「ぶっ飛べ！！ストーンエッジ！！！」

ズドン！！！！

二匹の威力最強の技がぶつかり合い、大きな震動が起こる。

それにより、堂々御触れの石室の壁にひびが入り、浸水し始めた。

村長「ヤバイぞ！皆、ダイビングが使えるポケモンを出せ！！」

ユウヤ「おう！ジーランスー！！」

ナオヤ「お、俺も？…ジーランス行ってくれ！」

メイ「私も！？わわっ、ホエルコ！」

皆は自分のポケモンを出すが、

コウタ「そう言えば僕…まだジーランスもホエルコも貰ってない…」

コウタは何も出来ず、呆然としていた。

村長「あつ！すまんコウタ！！ポケモンを渡すの忘れてた！？」  
ユウヤ（またか…何時もは一年に二、三回忘れるから、今年はい方なんだが…）

ユウヤは忘れっぽい村長に内心呆れていた。

村長「ひとまずこいつに乗れ！ジーランス！！」

村長は自分のジーランスをだす。

その時、堂々御触れの石室が本格的に崩れ始めた。

村長「本格的にヤバイぞ！皆、早くダイビングの指示を！！」

4人は自分のポケモンに、コウタは村長のジーランスに掴まった。

コウタ（結局僕のポケモンについてはスルーですか…）

村長「いくぞ！」

村長、ユウヤ、ナオヤ、メイ「ダイビング！！！」

バシャン！

5人はダイビングを使い、空気の膜に包まれて崩れる祠から抜け出した。

レジロック「ガババババ………」

レジアイス「勝負ありましたね……」

見ると、レジアイスVSレジロックの勝敗が着いたようだ。岩タ  
イプであるレジロックは水に弱いため、溺れていた。レジアイスは  
平気そうな感じだ。

コウタ「やっと終わったみたいだね」

村長「よし、一度村へ戻ろう。このまま居れば海流によって戻れ  
……」

レジアイス「とどめです。

かみなり」

全員「ハア!!?」

その時、眩い光と全員の悲鳴がなり響いた……

守護神をゲットせよ！前編（後書き）

後書き

アイスとロックのキャラが酷い…

守護神をゲットせよ！後編（前書き）

ナオヤ「これも前編と同じく酷いな」

だって…前編は今まで一番長かったのに…投稿直前に消えたんだから…これも前、後書き消えたし…

コウタ「でも酷いのは変わりませんよね」

……………（泣）

コウタ「では、後編スタート！酷いですが、こんな作者のために読んでやってください！お願いします！！」

ナオヤ「後、この小説に主人公最強設定が入る予定はありません」

## 守護神をゲットせよ！後編

コウタ達は、痺れながらも海流に乗って島へ戻ってきた。

コウタ「酷い目にあった…」

ユウヤ「あそこで雷を使うとは…」

メイ「本当に…あっ！コウタ！！あそこ！！」

メイが指差した先には、完全に気絶しているレジロックがいた。

村長「さあ、早くモンスターボールを！」

コウタ「ええっ！？僕がですか！！？」

村長「いいから早く！」

コウタ「はっ、はい！！」

コウタは躊躇しながらも、レジロックにモンスターボールを投げた。

レジロックは赤い光に吸い込まれ、モンスターボールは揺れ始める。

そして、静止した。

コウタ「……レジロックまで…」

ナオヤ「すげえ！！！！じゃあレジアイスは俺がg」

レジアイス「そうは行きませんよ」

レジアイスが海から上がって来た。

レジアイス「私のマスターはそこ（グズで間抜け面のトンマである）少年…コウタ君だけです。私は残念ながら（うざそうで明らかに馬鹿と断言できるMの）あなたに捕まるつもりはありません」

コウタ、ナオヤ「……………」

メイ「今さらっとヒドイ事いったわね……ナオヤについてはその通りだけど……………」

ナオヤ「……………」（泣）

コウタは泣き目になっているナオヤを無視し、レジアイスに向き直る。

コウタ「レジアイスさん」

レジアイス「はい、なんですか？」

コウタは真剣な顔でレジアイスに頭をさげ、

コウタ「ごめんなさい」

謝った。

レジアイス「……………そんな事はいいです…早く掛かってきなさい」

コウタ「???」

レジアイス「ロックと鉄屑は運で捕まえられましたが、私はそうは行きませんよ（ぼっこぼっこにしてあげます、間抜け面の）コウタさん」

コウタは急いで首を横に振る。

コウタ「いや、だから僕は…」

レジアイス「やらないんですか？（早くぶちのめしたいんですが…）」

コウタは、レジアイスを捕まえたくないと言っのが顔に出ていた。

村長「コウタ！早く捕まえんか！！」

コウタ「だつて…」

コウタの脳裏にさっきからのレジアイスの言動が浮かぶ。

コウタ（捕まえたらいつも一緒にいるんだよね…）

コウタはそんな事を考えていたが、

村長「ほら！こいつを受けとれ！！」

村長は、そんな事お構いなしにひとつのモンスターボールをコウタに投げ渡す。

コウタ「わっ！…これは…」

その中には、ジーランスが入っていた。

村長「こいつをやるから、早く捕まえんか！」

コウタ「は、はいっ！頼むよ、ジーランス！」

コウタがボールを投げると、中から光と共に、ジーランスが出て

きた。

ジーランス「……………」

コウタ「……………ジーランス？」

ジーランス「ZZZ……………」

コウタ「寝てるし……………」

レジアイス「……………私の負けです」

レジアイスがジーランスを見た瞬間、負けを認めた。

全員「え……………」

レジアイス「コウタさん、早く私を捕まえて下さい。さもないと……………」

レジアイスはれいとうビームを構える。

コウタ「わかったわかった（汗）モンスターボール……………」

コウタはこの急な展開を呑み込めぬまま、モンスターボールを投げるとレジアイスは何の抵抗もなく入り、やがてモンスターボールの振動も止まる。

コウタ「……………」

ユウヤ「……………」

ナオヤ「……………」

メイ「……………」

村長「……………」

沈黙が続く。

コウタ「どういう事？」  
村長「さあ？」

5人は、その後村人に見つかるまで呆然と佇んでいた。

## 守護神をゲットせよ！後編（後書き）

### 後書き

レジロック「アイス、何でワザと捕まっただ？」

レジアイス「…あのジークランスのレベルは…でした」

レジロック「まじか！？初心者用だろ！！？」（汗）

レジスチル「イマノワレワレノレベルハs」

レジロック「うるせえ！！！！のろいのろいのろいきあいパンチ！

！！」

レジアイス「チャージビーム×6＋きあいだま」

レジスチル「グギアアア！！！！……キラン」↑星になりました。

ナオヤ「はっ！」

どうした？

ナオヤ「なんか…レジスチルの事が妙に心配だ…あいつは何故か他人とは思えない…」

ま、まあそうだろうね…（苦笑）

それでは、今から1/24まで、受験のため連載を休ませてもら

います。もしかすると休憩時間に感想の返事を書いたり、短いのを投稿するかもしれませんが、基本来ません。では、この辺で失礼しました。（礼）

## 旅立ち・1（前書き）

勉強の合間にちよこちよこ書いてました。（汗）

レジロック「にしては短かすぎだぁ！！ドレインパンチ！！！」

うわぁぁぁ！！！！ち、力が抜けていく……………バタッ

レジロック「ひ弱な奴だな。さて、こっちも……」

## 旅立ち・1

????「起きろやバカコラア!!!!」

コウタ「へブツ!」

コウタはいきなり、誰かに殴り飛ばされて目が覚めた。

コウタ「いてて…ここは…?」

コウタが周りを見渡すと、見慣れた自分の部屋が目に入った。  
しかし、そこには明らかに場違いな人…いや、ポケモンが二匹…

レジロック「やつと起きたか。寝坊すけ」

レジアイス「おはようございます。(いつもながら間抜け面の)  
コウタさん。あの(単細胞短足の)パンチは痛かったですか?(そ  
うだったら幸いです)」

コウタ「……………」

あまりの事に、コウタは放心状態に陥っていた。

レジロック「にしても、ポケセンってのはいいとこだな。一発回  
復だぜ!」

レジアイス「(間抜け面の)コウタさん、(馬鹿みたいに)ぼ  
っとしてますが大丈夫ですか?」

コウタはこれが現実だと言う事をようやく理解し、  
レジアイス(遅すぎですよ、のろま)  
二匹に向かい合った。

コウタ「いくつか、質問良いですか？」

レジアイス、レジロック「いいぜ いいですよ」

コウタ（ああ、いいんだ…）

ダメだと言われると思っていたコウタは少し驚くが、気を取りなおして言った。

コウタ「……なんでここにいる訳！？いつポケセンまで行った！？選ばれし者って、マスターって何！？そもそも決め方テキトーじゃない！？第一レジスチルはどこ！？それに何で君達はレジスチルに厳しい訳！？」

二匹は途中までは冷静に聞いていたが、なぜレジスチルに厳しいのかを聞かれた瞬間、目に見えて動揺した。

コウタ「????。レジスチルがどうかしたの！？」

レジアイス「スチル……あいつは……」

レジロック「コウタ……だったな？……他のは出来るだけ答える

……だが、最後の質問だけは……答えられねえ……答えたくねえ……」

コウタが呆然とする中、二匹は肩を震わせる…人間なら「泣いている」という感じだった。

レジロック「少なくとも……俺達は……」

レジアイス「スチルを……信用していない……とても言うておきます……あんな鉄屑なんか……」

コウタ「……（汗）」

予想外の暗い雰囲気になってしまい、困惑するコウタ。と、その

時、

お母さん「コウタ〜皆来てるわよ〜」

コウヤ「おい、コウタ！早く来いよ！」

下から、コウタのお母さんとコウヤの声がした。

## 旅立ち・1（後書き）

後書き

よし、終わりつと…

レジアイス「おや、（バカで間抜けでアホでヘタレの）作者さんじゃありませんか。今回は短いですね、チャージビーム」

アババババババ痺れびれ」

レジアイス「特攻→のふぶき」

カキーン（色々な意味で一番酷いキャラだ、こいつ…）

レジアイス「何か言いましたか？ ロックオン、

絶対零度」

ちよつま、それは君は覚えな…

レジアイス「特別です」

ギヤアアアアアアアアア~~~~~!!!!!!

!!!カチーン

レジアイス「次回もこれ位短いと思われますね。（このボケ）作者の（勝手な）都合で」

「レジアイスの…性格を酷くし過ぎた…」

「レジアイス「絶対零度」」

「カチコチーン」

## 旅立ち・2（前書き）

レジアイス「今回も短すぎますね」

レジロック「さて、どんなお仕置きがいいか…」

ちよっ…受験生にそれはないって…

レジアイス「絶対零度」

カチコチーン

レジロック「岩！石！砲！」

（ちゃかりス。ブラの大。空っぽいぞ！って）ギイヤアアア〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！！！……………キラン

レジアイス「（屑）作者は星になりました」

レジロック「ついでに、絶対零度と岩石砲は作者にしか撃てねえからな」

## 旅立ち・2

コウタ「今行く！ちょっと待ってて」

コウタは、ひとまず声をかけてきたお母さん達に返事をし、レジロックとレジアイスに向き直る。

コウタ「…つらい事があったのは分かったけど…ともかく今はボールに戻っててくれない？」

レジアイス「……………わかりました」

レジロック「……………わかったよ」

コウタは二匹をボールに戻し、机の上にあった二つのモンスターボールを取ってから（その中の一匹は気絶していたがコウタは気にせず）下のリビングへと向かった。

リビングには、コウタの予想通りナオヤとメイ、村長もいた。時計を見ると、もう11:30過ぎだ。

ナオヤ「おはよ！コウタ、眠れたか？」

コウタ「う、うん。（目覚めは最悪だったけどね…）」

コウタは少しはぐらかす。と、そこへ村長が話に入ってきた。

村長「コウタ、もう旅立つ用意は出来ているか？」

コウタ「あ、はい。一応」

元々、ポケモンを貰ったらずに旅立つ予定だったので、荷物などは昨日用意して玄関においてあった。

村長「そうか、では今から旅立つんだな」

コウタ「はい、朝ご飯を食べたら、もう行きます」というより、時間的にもう昼か……」

ユウヤ「それなら俺が、気球でカイナまで送ってくよ、どうせ用があるし」

ユウヤが話に入ってきた。

メイ「いいんですか！？やったー！」

メイは跳び上がって喜ぶ。

コウタ（こうゆうところは女の子だなあ）

ナオヤ（こうゆうところだけは女の子だな、何時もとは大違いだ）

二人はそれを見て、ほとんど同じ様な感想を抱いたが、

メイ「ナオヤ、こっちにこようね」（怒）

………メイには聞こえたようだ。

ナオヤ「ヒィ〜〜〜〜………お許しを〜」

と、そこへ

ユウヤ「メイ、そのくらいにしておけ。もう行くぞ」

ユウヤがメイを止めた。

ナオヤ「兄貴、ありが……」

ユウヤ「その代わり、気球の中でしていいから」

メイ「はい」

ナオヤ「……………」（兄貴に期待した俺がバカだった……泣）

ナオヤはもう、半ば人生に絶望していた。

## 旅立ち・2（後書き）

後書き

くっ…アイスにロックは調子に乗って…こうなったら、まだまだ  
あいつらの古傷をつついて…

レジアイス「絶対零度」

レジロック「岩！石！砲！！！」

……… キラン ↑ 叫ぶ間もなく星になった。

### 旅立ち・3（前書き）

レジアイス「……………」

レジロック「……………」

あの〜どうかしました？

レジアイス「…酷いほどに短い…」

レジロック「これは…無いだろ…もうちょっと書いてから投稿しろよ…」

だって…流石にこれ以上DS持ってたらヤバイでしょ…受験生だし…

レジアイス「この『旅立ち』シリーズの出来も最低最悪」

レジロック「一度、懲らしめる必要があるな」

ややや止めて下さい……

レジアイス「問答無用です。めいそう×無限大」

レジロック「お前に全てをぶつけてやる。つるぎのまい×無限大」  
ちよっ…何でそんな技が使える訳…

レジアイス、レジロック「作者だけに特別です（だ！）」

このチート共がああ〜〜〜〜〜〜！！！！！！！！↑ヤケクソ

レジアイス「残念、作者にしか使えないので本編には関係ありませんよ」

そういう意味じゃなくて……

コウタ「では、本当に本当の今年最後の1話、どうぞ……！」  
スルーか……

### 旅立ち・3

コウヤ「気球の準備できたぞ〜！」

コウヤの目の前には、浮かび上がる用意の出来ている気球と、それに繋がれたペリッパがいた。

メイ「空の旅、楽しみね。ナオヤ〜」（黒笑）  
ナオヤ「……………」（冷や汗＋大泣）

メイとナオヤも仲良くしている。ちょっとナオヤが縛られていたりするが。

コウタ（カイナに着いたら…よし、僕ならできる！）

コウタは心の中で何かを決心していた。

村長（そういえば…なぜレジアイスはLv20前後のジールランスに負けを認めたんだ？）

見送りに来ていた村長が自分が疑問に思っている事を考えている間に、

コウヤ「皆、乗り込め！」

コウタ、メイ「お〜！」

ナオヤ「…お〜…」

お母さん「行つてらっしゃ〜い」

全員元気よく乗り込み、気球は飛びたった。

メイ「さて、ナオヤ、紐無しバンジーとパラシュート無しスカイダイビングどっちがいい？」

気球がある程度飛び上がった後、メイがナオヤに聞く。

ナオヤ「……………」

その後、気球の中で何が合ったのかは、その場に居た者しか知らない。勿論、誰も語ろうとはしなかった。ひとつ言える事は、その後ナオヤが「あれ？俺って生きてるの？マジで！？」と本当に不思議そうな顔で言っていた事だけだ。

そして一行は、カイナシティに到着する。

### 旅立ち・3（後書き）

後書き

レジアイス「絶対零度」

レジロック「岩！！！石！！！砲！！！！！！！」

…キラーン ↑この世の果てまで飛んでった。

コウタ「ん？置き手紙が…」これからマジに執筆休みます。後、  
【受験だから休みます】という前、後書きは1/24に消しておきます』だって」

リョウヤ「という事で読者の皆、来年の一発目は俺達だぜ！」  
ハヤト「もうそんな時にはあけおめの時期、とつくに過ぎてるだろうな」

コウタ「執筆再開は1/24ですので、早ければすぐ投稿します！来年もよろしく願います！！」

**\*もうひとつの出会い\* (前書き)**

もうだめだ!!! 僕の勉強しないといけないという理性は書きた  
いという欲望に勝てなかった!!!! ということで投稿です!!!!

コウタ「決意弱っ!!!?」

ナオヤ「しかも俺達の出番は?」

後3、4程無し!!!!

コウタ、ナオヤ「……………」

ではっ!!!! 本編スタート!!!!

\* もうひとつの出会い \*

コウタ達が村から旅立った頃…

ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ120番道路。沢山の背の高い草が鬱蒼と生えるこの場所で、あの7人のトレーナー…ミスト達が昼食の用意をしていた。周りの草は刈り取られている。

リョウヤ「じゃ、そろそろ水汲みにでも行ってきますか」

ハヤト「俺も魚でも採りに行くか」

ブイマル「おう、行ってこい！飯は俺とヒカルに任せろ！てことで俺は飯炊くか」

ヒカル「じゃあ、僕はスープでも作りますよ」

その会話の後、リョウヤとハヤトは近くの川へと向かって行った。

121番道路、送り火山近くの水道

此処に先程出発した二人の姿があった。

リョウヤ「よし、ロトム！ウオツシュロトムだ！！」

ハヤト「ルカリオ！行け！！」

ロトム「トム」

ルカリオ「リオッ！」

二人は芝刈機の姿をしたポケモン、カットロトムと、ルカリオを繰り出した。ロトムはすぐさま、リョウヤの持つて来ていた小型の洗濯機に乗り移り、ウォッシュロトムになる。

リョウヤ「ロトム、いつもの通りだ」

ロトム「ロトッ！」

ハヤト「ルカリオもだ！」

ルカリオ「オッ！」

ロトムは尻尾の様な管で水を吸い込み、ルカリオはサイコネシスで魚を採る。

ある程度採った時、リョウヤが何かに気づいた。

リョウヤ「ん？何だ、あれは？」

ハヤト「え？どれだ？」

リョウヤ「ほら、川の反対側の岸边」

リョウヤが指差した先には、何やら黒い何かが倒れていた。

ハヤト「あれは…ポケモンか？」

リョウヤ「さあ？」

ハヤト「ともかく取ってみるか。ルカリオ、サイコネシス！」

しかし、それは動く気配がしない。

リョウヤ「悪タイプのポケモンか？」

ハヤト「みたいだな」

リョウヤ「となると…こいつで、ラグラージ！」

ラグラージ「ラッジ！」

出てきたラグラージは、バトルと思い威嚇の雄叫びをあげる。

リョウヤ「ラグラージ、あそのポケモンを連れて来てくれ」  
ラグラージ「ラ…ラグ！」

ラグラージはバトルではないと知ると少し落胆したが、すぐに立ち直ると川に飛び込みその黒いポケモンを抱えて戻って来た。

リョウヤ「こいつは…まさか!？」

ハヤト「こいつと生きている内に会えるとはな…」

そのポケモンを見た2人は驚愕する。

ハヤト「ひとまずブイマル達の所に戻ろう」

リョウヤ「嗚呼、そうだな」

2人とロトム、ルカリオ、黒いポケモンを抱えたラグラージはもと来た道へと戻って行った。

ブイマル「お、2人共遅かったな…ん?ラグラージ、何だそれは?」

リョウヤ達が戻ってくると、何時もどおりご飯を炊いていたブイ

マルが、2人と3匹の連れてきたポケモンに気付いた。ついでに、ヒカルは結構な大きさの鍋でコンソメスープを作っており、シユウとマサヤはこれまた何時もどおりバトルしていた。

リョウヤ「おう、実はな…」

マサヤ「つばめがえし」

ハヤト「川に行ったら…」

シユウ「シャドーボールDA!!」

リョウヤ「川の向こう岸に…」

マサヤ「マジカルリーフ」

ハヤト「こいつが倒れてて…」

シユウ「れんごくでうち落とSE!!」

リョウヤ「それで俺のラグラージで…」

マサヤ「にほんばれ から ソーラービーム」

ハヤト「助けたって訳だ」

シユウ「オーバーヒートで受け止めRO!!」

ハヤト、リョウヤ、ブイマル「うるせえ!!」 (激怒)

3人は怒鳴ると同時にポケモンを出し、マサヤのトロピウスとシユウのシャンデラに攻撃を加える。

リョウヤ「ほのおのまい!!」

ハヤト「ナイトバースト!!」

ブイマル「ギアソーサー!!」

3人のポケモンであるウルガモス、ゾロアーク、ギギギアルの技が決まる。

トロピウス「ピウッ!」

シャンデラ「デラッ!」

2匹は横からの急な攻撃に反応しきれずに技は直撃、気絶してしまった。

マサヤ「トロピウス!!?」

シュウ「シャンデラ!!?」

2人はそれぞれ自分のポケモンに駆け寄る。

シュウ「なにするん…!」

ブイマル「お前らがいつもいっつも食事の準備もせず!更には人の話まで邪魔するからだよ!!」(激怒)

リョウヤ「しばらく大人しくしてろ!シュウ!!お前はもう立派な18だろ!マサヤ!!弟だからって容赦はしないからな、何かを期待した目で見るな!!!」(激怒)

マサヤ「うっ…!」

ブイマルとリョウヤに説教され、反省する2人…

シュウ「乱入するなら相手するからYO!!!」

いや、反省したのはマサヤだけであった。

ハヤト「調子のんなよてめえ!!!」(激怒)

ハヤトが暴言を放ち、モンスターボールを構える。

ヒカル「ちよつと皆さん、落ち着いて下さい!今はこのポケモンの傷を治療するのが先でしょう!!」

鍋の火と、ご飯を炊いていた焚き火の火を消してきたヒカルが皆に、本来の目的を思い出させた。

ブイマル「そうだな、だが今はコレしかない。『いい傷薬』」  
リョウヤ「無いよりましだろ」

ヒカルに言われ、落ち着いたブイマル達が黒いポケモンに薬を付けようとした時、

シュウ「おいおい！！バトルしないのKAI！！！」  
ヒカル「行け！ダイノーズ、じゅうりよく！！」  
シュウ「ぐばっ」

まだ空気を読めていないシュウは、ヒカルの繰り出したダイノーズの重力により、倒れた。

シュウ「おい！一体何が…」

ヒカル「でんじは！！！」  
シュウ「アバババ」

後ろでシュウが痺れている間に、ブイマルが黒いポケモンにいい傷薬を使い、ある程度の傷を治す。その後、七人はポケモンをボールに戻した。（シュウのポケモンはヒカルが戻しておいた）

黒いポケモン「う…う…ん…此処は…」  
ブイマル「おう、目を覚ましたか」  
リョウヤ「此処は120番ど…ん？」  
ハヤト「おい、今こいつ…」  
マサヤ「喋ったな」



6人「シュウ（さん）（先輩）がまともな事を言うなんて！！？」

シュウ「そっちKAI！！？」

負けじとシュウがつっこむ。

ブイマル「まあ、ダークライに会えたというのは凄いな。リョウヤ、ハヤト」

ダークライ「何故…俺の事を知っている？（ああっもう！！！！早いところ傷を癒してデオキスにリベンジしてえんだよ！！！！だからほっといてくれよ！！！！）」

またも心の中で悪態をつくダークライ。

ミスト「………古い…文献に…記録が残っている………」

ダークライ「…そうか…（あれ、俺ってそんな人の前に出たっけ？そりゃ少しは表した事はあるが…それか？）」

ダークライが記憶を辿っていたその時、

ズドオオオン！！！！

全員「！！！！？？」

大きな爆発音と共に、大量のエネルギー弾が飛んできた。

ヒカル「何だ！！？」

全員が空を見上げると、そこに居たのは…

以前デオキシスが放った、デオキシス自身の影だった。

ダークライ「デオキシス…しかも分身…デイバイトか！！？（もう俺の居場所が割れただと！！？あいつめ…余計な事をするなあああ~~~~~！！！！！！！！！！）」

ダークライはいつまで素を隠しきれのだろうか…

リョウヤ「へえ、伝説のポケモン、デオキシスの分身か…デイバイトねえ」

ハヤト「また伝説のポケモン…流石は分身、数が多いな、ざっと100…2、30つてどこか」

ヒカル「全員が全ての手持ちを出したとして…一匹3、4匹倒せば良いですね」

ブイマル「楽勝だな」

余裕を見せる7人。

ダークライ「（何い！！？あいつらは本体まではないが結構強いぞ！！？それを一匹で3、4体？無理にきまつてらあ！！！！）待て、あいつらはただのポケモンじゃ…」

マサヤ「ないんでしょ 大丈夫 大丈夫」

シュウ「俺達の相手じゃないZE!!!!」

ミスト「……行くぞ……」

ミストの言葉に、7人はモンスターボールを六つ全て構える。

ダークライ「おい、本当にあいつらは……」

ハヤト「心配すんなって。さて、行くか!!!!」

サザンドラ!

ルカリオ!

ゾロアーク!

デスカーン!

ドンカラス!

アブソル!」

リョウヤ「覚悟しろよ、お前ら!!!!」

ラグラージ!

ロトム!

ウルガモス!

トゲキッス!

ツボツボ!

ヌケニン!」

ヒカル「その程度なら負けませんよ!!!!」

ライチュウ!

エレキブル!

ダイノーズ!

アギルダー!

ムクホーク!

シビルドン!」

マサヤ「ぶっ飛ばしてやりますよ　！！！」

メガニウム！

ドリュウズ！

トロピウス！

ジュカイン！

キングドラ！

ジュペッタ！

シュウ「ウズウズするZE！！！！やるKA！！！！」

ゴウカザル！

メタグロス！

シャンデラ！

リザードン！

エアームド！

ドータクン！

ブイマル「俺達をなめんなよ！！！！ぶっ潰せ！！！」

イーブイ！

ギギギアル！

ヨノワール！

ハピナス！

グライオン！

ミロカロス！

ミスト「……………行くぞ……………！お前達！！！」

メタモン！

テッカニン！

フリージオ！

ドーブル！

デンチュラ！  
エルレイド！

7人の…全42匹のポケモンが、一斉に戦いへの雄叫びを挙げる  
……

そして、とうとう出会った……7人と一匹。もうひとつの出会いが……運命を更に大きく動かす……

## \*もうひとつの出会い\* (後書き)

後書き

さてさて、これからしばらくはかなり重要な話になりますよ

レジアイス」どうせ駄文ですけどね」

…… (泣)

リョウヤ「てか、然り気無く俺とマサヤが兄弟つつう設定でたな」

マサヤ「無理矢理感 満載 ですけどね」

…… (大泣)

ハヤト「俺達の手持ちポケモン……だいぶタイプが片寄ってる奴がいるぞ」 (汗)

だってリアル君達がそうだったからでしょ。リアルマサヤなんか「草の御三家全部+トロピウス」とか言ってたし、まだ出てないけどある奴は「グランドとサンダーとミュウツーと……」とか言い出したし……！伝説は駄目って言ったのに……！

ブイマル「どうでもいいな」

断言しなくても……

7人「それでは読者の皆さん、感想、評価の方、宜しくお願いし

ます。「(礼)

あ、言ってくれてありがとう。

リョウヤ「お前にまかせるのは心配だ」

.....

**\*最速の閃光\*（前書き）**

今日の塾が実力テストで終わった後休憩と称して書きました！！！！

コウタ「手応えはあったらしいよ」

それから、今回ぶっ飛び設定が出るかもしれません。

コウタ「もう自分の知人の名前をモジってキャラにしてる君が今更何を言う、性格も似たような感じにしてるし」（汗）

大丈夫、本人に許可取ってるから（笑）

それでは、本編どうぞ！！！！

＊最速の閃光＊

ヒマワキシティとミナモシティを繋ぐ120番道路、此处で今、大規模なバトル……いや、戦闘が行われていた。

7人は、1人1人で6匹の手持ちに指示していると言うのに、ちゃんとポケモン達に的確な指示を出している。

ここで、ミストがデオキシス・デИБイトの一瞬の隙を付いて6人に目配せし、7人同時に技を繰り出した。

ヒカル「ダイノーズ、じゅうりよく！」

ミスト「ダブル、ワイドガード、メタモン、ラグラージにへんしん」

ハヤト「ルカリオ！」

リョウヤ「ラグラージ、ツボツボ！」

マサヤ「メガニウム ドリュウズ トロピウス ジュカイン！」

シュウ「ゴウカザル、ドータクン、リザードン、メタグロス！」

ブイマル「グライオン、ヨノワール！」

ミスト「エルレイド、メタモン！」

ヒカル「エレキブル、ダイノーズ！」

全員「じしん……！」

相手の隙をつき放たれた七人のコンビネーション、単純なだけに強力な17匹分の地震コンボに耐えられるはずがなく、デオキシス・デИБイトは全滅した。かかった時間は僅か10分程である。

ダークライ「……………（呆気な……！……！）て言うか今の人間とそのポケモンってのはそんなに強えのか……？ たしかにアイツらは分身だから弱いんだが、あれは早すぎだ……！……！ 待てよ、こいつらに手伝っ

て貰えば…いや、信用できるのか！！？だが、今のままでは…くっ  
…俺は、俺は、どうすればいいんだあああああ~~~~~！！  
！！！！！！！！」

ダークライの心の叫びも、まもなく出てきそうである。

リョウヤ「弱かったな、いくら伝説だったってこれじゃあな」  
ハヤト「全くだ」

???「そうか…では、本物はどうか！！！！サイコブースト！！  
！！」

戦闘が終わり七人が肩の力を抜いた瞬間、突如念の力を込めた光  
球が落とされた。

ブイマル「ハピナス、まもる！」  
ハピナス「ハッピー！！」

咄嗟にブイマルがハピナスにまもるを指示し、サイコブーストを  
防ぐ。

ヒカル「何だ！？」

7人とダークライが再度、空を見上げると

デオキシス「また会ったな、ダークライ」

デオキシスが浮かんでいた。

「ダーククライ……デオキシス……もう本体が……（ちいっ！来るの早えぞ……！！彼奴は分身とは格が違う……幾らデバイスを簡単に倒したからって人間と普通のポケモンで対抗できるか……くそっ！！！！俺の体が動けば……ちつくしよおおおおお~~~~~！！！！！！！！！」

怪我が完治していない事を恨むダークライ。

リョウヤ「じゃあ……誰があとと戦うか？」

シュウ「俺がやりたいZE!!!」

マサヤ「僕がやります！！！」

ブイマル「俺がやらずに誰がやるんだ!!!」

ハヤト「争ってもしょうがないだろ、ここは間を取って俺で」

シュウ、マサヤ、ブイマル「何故そうなる!!?」

デオキシス、ダークライ「こいつらは俺を（あいつを）舐めているのか！！？」（怒）& a m p ;（汗）

下らない事で争う4人に対し、同時にデオキシスは怒り、ダークライは焦る。

ヒカル「待って下さい、皆さん……ここは皆で……」

ダークライ「（そうだ…大体彼奴に一人で挑もうなど無謀すぎる…万全な状態の俺でさえ互角なのに…）」

慌てたダークライはヒカルの言葉に一度落ち着き、その意見に賛同し…

ヒカル「ジャンケンでもして決めましょう！！！」

ダークライ、デオキシス「！！！？？」

ようとしたが、その続きを聞いて愕然とする。

ダークライ「（待て待て待て！！…嘘だろ！！？）」

デオキシス「やっぱ俺を舐めてやがる…」（激怒）

2匹の考えなど露知らず、7人はジャンケンを始めてしまった。何回かのあいこの後、勝ったのは…

ヒカル「やった！」

ブイマル「ちっ…」

ヒカルであった。

ヒカル「じゃあ行きますよ、まずは戻れ！」

ダークライ、デオキシス「え！！！？？」

敵同士である筈の2匹の声がまたハモる。それもその筈、ヒカルはライチュウ以外の全てのポケモンをボールに戻したのだ。ヒカル以外の6人は全ての手持ちをボールに戻す。

デオキシス「お前…！？」

ヒカル「1対1…これで互角ですね」

デオキシス「ふざけるな!!!俺をそんな人間の普通のポケモン等と同じにするな!!!」(激怒)

ヒカル「同じかどうかは戦えば分かりますよ」

デオキシス「てめえ!!!やってやるうじゃんか、速攻で決めてやる!!!」

ヒカルの挑発に乗ったデオキシスはその身をスピードフォルムへと変化させる。

デオキシス「くらえ!!!しんそく!!!」

デオキシスが物凄い速さ…神速と言えるスピードでライチュウに突っ込…

ライチュウ「ライ！」

めなかった。

デオキシス「な……」

ダークライ「何だと！！？」

ライチュウはデオキシスのしんそくを越える素早さで突撃をかわし、10万ボルトを浴びせる。

デオキシス「ぐばっ……」

ヒカル「今だ！ダークテール！！」

ダークライ、デオキシス「な！！？」

2人は3度、声がシンクロする。何故なら、ヒカルが聞いた事もない技をライチュウに指示したのだ。

ライチュウ「ライチュウ、ライ！！」

闇の様な物を纏った尾が、デオキシスを襲う。

デオキシス「がは……何なんだ……コイツは……」

こちらは他人事の様に戦いを見物する6人。

リョウヤ「いや、ヒカルも手を抜かないな。いや、相手が伝説のポケモンだから当然か」

ハヤト「オリ技炸裂つてとこだな」

マサヤ「レベルは デオキシスの方が 上っぽいけど ライチユウも負けてないですね」

ダークライ「オリ技？レベル？？」

長い人生ポケの中でも聞いた事のない単語の連続でダークライは混乱していた。

シュウ「ダークライはオリ技とレベルの事を知らないのKAI！

！！」

ダークライ「何なんだ？？それは？？？」

ブイマル「それなら俺が教えてやるよ」

ブイマルが得意そうに話す。伝説のポケモンが分からない事を自分が知っているの鼻が高くなっている様子。

ブイマル「オリ技つてのはオリジナルの技、要するに自分達で作った自分だけの技だ。今のヒカルのダークテールはふいうちとアイアンテールの複合技だな。で、レベルはそのまんまポケモンの力量<sup>レベル</sup>だ。俺達人間にはまだ詳しく分からないけど、ポケモンのレベルには制限が無いらしく無限にあがると予測されている。ま、その数値も人間の基準だがな。今の確認されている中で最高レベルは今まで開催された全14回、常にWCRの上位にいる3人の切り札、もう上がらないとも言われているレベル……Lv336だ。ついでに俺達のポケモンは、万全な時に大体Lv220〜290位だな」

ダークライ「レベル……ポケモンの力量……WCR???」

ブイマル「簡単に言えば誰が最強の称号……ポケモンマスターなのかを決める大会さ。まあ、最近は殆どさつき言った3人だけで争ってる状態だがな」

ダークライ「……（いつの間に人間はこんなにも発展したのだ……もしかすると……コイツらが信用出来るのなら、或いはそういう手も……）」

さて、ヒカルVSデオキシスの戦いは……

ヒカル「でんこうせっか!」

ライチュウ「ライライ!!」

ヒカルの優勢だった。

そもそも、アタックフォームとスピードフォームで攻めて攻めて、攻撃が来たらディフェンスフォームになりまもるを使う。そんな単調な戦略が臨機応変に戦うヒカルに通じるはずもなく、

デオキシス「まもる」

ヒカル「フエイント!!」

デオキシスのダメージは蓄積していく一方だった。

デオキシス「ぐ……俺が……こんなやつに劣勢だと!!?……ならば!!」

デオキシスはアタックフォームになると、自分の正面に巨大な念の球を造り出す。それは先程、不意打ちをした一撃と同じ技の様であつたが大きさが格段に大きくなっていた。

ヒカル「へえ、それが君の切り札か……じゃあ僕も切り札、見せちゃおつか」

ライチュウ「ライ!!!!」

シュウ「ヒカルが切り札を使っらしいZ E ! ! !」

ミスト「……ハヤト……」

ハヤト「はいはい、分かってますよ。行け、デスカーン ! ! !」

ハヤトはミストに言われ、ボールからデスカーンを出す。

ハヤト「デスカーン、シャドーボール ! ! !」

デスカーン「カッン」

ダークライ「また……知らない技……」

デスカーンは自分の影の様な手の形を平べったく変え、自分とダークライ、ハヤト達を包み込んだ。

ハヤト「ヒカル、ライチュウ、思いつきやって良いぞ」

ヒカル「はい ! ! ! 行くぞライチュウ ! ! !」

ライチュウ「ライ ! ! !」

ヒカル「ギガルクスフラッシュ!!!」

ライチュウ「ライツチュウ~~~~ウ!!!」

デオキシス「!!!!??」

ヒカルが技の名前を叫ぶと共に、ライチュウを中心に眩い光が広がって行った。それは技の名の如く、十億<sup>ギガ</sup>ルクスの明るさを持つ閃光<sup>フラッシュ</sup>だった。

ダークライ「これは……」

デスカーンの腕の中は真っ暗な空間の筈が、ギガルクスフラッシュユが放たれた瞬間一瞬だけ光に包まれた。

リョウヤ「これがヒカルの切り札、ギガルクスフラッシュだ。その名の通り、10億xもの明るさの光を相手に浴びせる技。あ、

後Lxって言うのは明るさの単位の事」

ダークライ「それで……どうなるんだ？」

中々意味を理解しないダークライにハヤトが補足を入れる。

ハヤト「太陽の光を地球上から直接見ると約13万Lxの光を見る事になる。その約8000倍の光を直接見ると……どうなると思うか？」

ダークライ「眩しいな」

ハヤト「それですむと思うのか？」

ダークライ「？」

ハヤト「人間なら失明の危険もあり、ポケモンでもしばらくは完全に視力を失う」

ダークライ「なっ……」

ハヤト「さあて、始まるぞ。ヒカルの苛めが」

ハヤトはデスカーンにシャドーベールを解除させ、ヒカルの戦いの傍観を再開した。



デオキシス「こ……これは……目が……開かない……何も見えない……」

デオキシスはそのあまりの眩さに視力を一時的に失い、サイコブリストを中断した。

ヒカル「チャンスだよ、ライチュウ！！ライジングダークテール  
ラッシュュー！！」

ライチュウ「ライチュウ、ライ！！」

ライチュウは動きの止まった所を狙い、シャドーテールを使ってデオキシスを上に跳ね飛ばし、更にひかりのかべを足場にしてジグザグに尾で打ち上げて行く。

デオキシス「ぐう……」

ヒカル「行けえええ！！！！」

ライチュウ「チュウウ！！！！」

ライチュウは止めとも言わんばかりに、縦回転をかけたシャドーテールを地面に向かってデオキシスに打ち付けた。

それらの攻撃は、全て胸の核に確実に当てており、目の見えないデオキシスは抵抗出来ずに受けている途中で気絶した。

デオキシスは地面に向かい、物凄い勢いで落下して行く。

ブイマル「ヒカルの勝ちだな」

マサヤ「意外と 呆気なかった ですな」

シュウ「これで大丈夫だZ E!!! ダークライ!!!」

ダークライ「す… 凄い… (本当になんだ!!!? コイツらは!  
!?もしかしたら俺より強えんじゃねえのか!!!? 更にコイツらよ  
り強い人間とポケモンがいる… 信用出来るのなら…!!!)」

7人とダークライが勝利を確信した時、皆の目に突然翠色の龍が  
飛び込みデオキシスを受け止めた。

**\* 最速の閃光\* (後書き)**

後書き

リョウヤ「駄文」

ハヤト「終わり方中途半端」

ブイマル「設定ぶっ飛び過ぎ」

そうかな？ポケモンと言う者は無限の可能性を持っている。だからLvも覚えられる技も無限大と言う訳。（この世界では）

一応、公式リーグや大会では技の数を制限するルールがある事にしてるから。↑リョウヤとハヤトはスルー

ヒカル「WCRの常上位って…しかも最近は毎年TOP3を3人で独占、絶対にチートの強さを持ってるよな」

リョウヤ「見る限りチートに近いヒカルより強い俺やブイマル、ミストでも互角、手も足も出ないチャンピオン四天王フロンティアブレーン」

大丈夫、チートは出さない！！！（ジンダイ基準）

ブイマル「お前の基準が怪しい」

マサヤ「正直 心配 ですね」

だから大丈夫って♪

7人「絶対大丈夫じゃない（Z E！！！！）（ですね）（）」

断言しなくても……

リョウヤ「それにもう少し伝説のポケモンには威厳を持たせろよ、俺達に負けてるようじゃ駄目だぜ」

その所は大丈夫！！！！伝説のポケモンは強さも個性も物凄いら。

ミスト「……………本当だな？」

勿論！！！！

ヒカル「レベルはどのくらいですか？」

それはまた後で。ともかく強いと言っておくよ。

ハヤト「なんだか心配だな」（汗）

だから大丈夫って！

それでは、感想や評価、お待ちしています！！！！

シュウ「感想の返信も頑張ってるらしいZ E！！！！だから宜しくNA！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

---

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2012年1月8日18時50分発行